みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# あとがき



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 国立民族学博物館<br>公開日: 2017-12-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 河合, 洋尚<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00008643 |

塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』
国立民族学博物館調査報告　142:323-325(2017)

# あとがき

本書は，文部省科学研究費補助研究「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究A，塚田誠之代表，2015年4月-2018年3月）の中間成果を報告したものである。

本科研では，「歴史の資源化」をテーマとし，数度にわたる研究集会を実施してきた。とりわけ国立民族学博物館共同研究会「資源化される歴史――中国南部諸民族の分析から」（長谷川清代表，2014年10月-2018年3月）とは，テーマ的な近似性に加え，参加者が少なからず重複していることから，幾度となく共同で研究会を実施してきた。本研究会のメンバーではない科研の研究分担者も国立民族学博物館の共同研究会にゲストスピーカーとして発表するなど，2つの組織は「二人三脚」で研究を進めてきたといえる。具体的には，まず数名の研究分担者が国立民族学博物館の共同研究会で研究発表をし，さらに，2016年10月22日に国立民族学博物館で国際シンポジウム「中国における歴史の資源化――その現状と課題に関する人類学的分析」を開催した。順序としては逆になるが，本書は，第一部で国際シンポジウムの成果を掲載し，第二部では共同研究会などにおける成果を掲載した。また，本書の編集作業にあたっては，塚田が全体の企画と総括をおこない，河合が原稿の整理や議論の補足を担当した。

本書の執筆者の多くは，『中国の民族文化資源――南部地域の分析から』（武内房司・塚田誠之編，2014年）や『民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から』（塚田誠之編，2016年）の執筆メンバーであり，これまでも特に中国南部における民族文化の資源化について討論してきた。その流れにおいて今回，新たに焦点を当てたのは歴史である。言うまでもなく，歴史は，中国を対象とする人類学的研究には欠かせないテーマである。今までも数多くの歴史人類学的な論文や著作が世に出され，人類学において歴史をいかに扱うかが議論されてきた。しかしながら，中国の人類学的研究において，歴史の多元的な存在とその「資源化」のあり方について，正面から議論がなされてきたとはいいがたい。ヴァルター・ベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」を引用するまでもなく，歴史とは，現在の社会的文脈から一部の要素を拾い出し，組み立てた「構築物」であり，したがって歴史は無数につくられうる。中国においても，歴史のあり方は一つではない。たとえ同じ少数民族であっても，あるいは同じ漢族のエスニック集団であっても，正統とされる「単数の」歴史のほかに，知識人や民衆がさまざまに認識する「複数の」歴史が存在する。

さらに，近年の中国においては，知識人や民衆がかかげる「複数の」歴史が強調され，目に見える形で表れ始めている。本書は，こうしたプロセスを「資源化」という概念で

表現し，事例の提示と考察をおこなった。「資源化」とは何かについては，本科研でさらに探求していかねばならないテーマであろう。しかし，本書の事例で用いられる「資源化」が市場経済という枠に限られていないのは明らかである。最後の吉野報告で指摘されているように，目に見えない歴史という概念を「資源」とするためには，たとえ観光開発による実利の獲得を目的とするにしても，文化を客体化し，歌や文字として表現する必要がでてくる。本書で議論の対象とするのは，ある特定の民族／エスニック集団における「複数の」歴史を認めると同時に，それがいかに政治経済的に使われる資源として発展してきたのか，その「プロセス」に着目することなのである。本書は，こうした「複数の」歴史が実体あるものとして構築されはじめてきたプロセスを，近現代の社会的状況に位置づけながら系統的に考察している点で，従来の諸研究とは一線を画している。

もっとも本書は，あくまで「中間報告」であり，各々の論考は，上記の趣旨に合わせた事例を報告することを主な目的としている。その意味で，本書は，中国における歴史の資源化を理論的に考察するものではなく，その論拠ともなりうるデータを主に提示しているともいえる。換言すれば，本書は，歴史の資源化をめぐる諸現象をリアルタイムで伝える，速報性を重視したものとなっている。しかし，なかには貴重な視点や発想が含まれている論考もあり，この科研および共同研究会の成果達成に向けて，重要な一歩を踏み出しているといえよう。

ご覧の通り，本書は，前半の第一部で国際シンポジウムの成果を掲載し，後半の第二部で共同研究会などの成果を掲載しているため，一見して変則的である。それぞれ別に刊行すべきだと思われる読者もおられるかもしれない。しかし，我々は，両者の議論は内容的に関連性が強いだけでなく，相互補完的であるとも考えている。例えば，第一部では，民族やエスニック集団よりも中華ナショナリズムや観光化に焦点を当てる議論が少なくなく，また少数民族としては回族・ハニ族・朝鮮族しか触れられていない。それに対し，第二部では，モンゴル族やチャン族，ミエン（ヤオ）族など少数民族の事例がいくつか掲載されており，さらに民族／エスニック集団ごとの資源化のプロセスを描いている。それにより，とかく中華民族＝漢族とされがちな現状において，多民族の共存する国家として，少数民族もまた軽視出来ないことが再確認されている。他方で，本来ならば，異なる場で発表した成果であるため，各発表者の中間報告書だけを並べればよかったのかもしれない。しかし，我々は，国際シンポジウムにおけるコメントにも貴重な情報が多く含まれるため，捨ておくのは勿体ないと考え，変則的な印象を与えてしまうのを覚悟のうえで，そのコメント討論も同時に掲載することにした。中国における歴史の資源化についての現段階での議論を「ホットな」ままでお伝えすることで，今後につなげたいと願ったからである。

本書の完成においては，国際シンポジウムおよび共同研究会に参与した方々による貴重な議論が大きく関係しているのは言うまでもない。こうして本書を皆様にお届けでき

ることになったのは，関連の研究集会にご参加いただいた皆様のおかげである。また，国際シンポジウムの開催にあたり開幕の辞を添えていただくなど，ご支援をいただいた須藤健一館長にも厚く御礼を申し上げたい。さらに，本書の出版にあたり貴重なコメントをいただいた匿名査読者の先生，および編集実務にあたられたスタッフの皆様にも感謝の意を表する。歴史の資源化へのアプローチは端緒についたばかりであり，まだ課題も多く存在する。しかし，本書が今後の議論に何かしらの貢献ができるとすれば，それに勝る喜びはない。

河合　洋尚